東京ジャーミイ金曜日のホタバ

2006年5月26日

教えることの基盤は慈悲である。

ムスリムの皆様。「慈悲あまねくお方章」は、皆様もご存知でしょう。アッラーの美名で始まるクルアーン唯一の章です。奇跡的な音声的均衡があります。「それであなたがたは、主の恩恵のどれを嘘と言うのか。」という問いが、この章では３１回繰り返されています。「慈悲あまねく御方が、このクルアーンを教えられた。（かれは）人間を創り、物言う術を教えられた。」

メッカの偶像崇拝者たちは、アッラーの「慈悲あまねくお方（ラフマーン）」という美名に強い拒否を示しました。しかしこの美名を否定する論理的な釈明を行ったわけでもありませんでした。なぜならその意味は「無限の慈悲の源」であるからです。慈悲を望まない人、慈愛を受けることを望まない人がいるでしょうか。ここでの「ラフマーン」は、韻律上、「慈悲と慈愛、愛情と慈しみに満たされたお方」という意味を持ちます。また、フダイビヤ条約の際、メッカの外交団の団長であったスヘイル・B・アムルの行為を思い出してみてください。アッラーの使徒は、書記をしていた聖アリーに、『ビスミッラーヒラフマーニッラヒーム』と書きなさい、と命じられます。スヘイルはすぐにそれに反対し、「ラフマーンとはなんだ。ビスミッカッラーフンマ（アッラーの名によって）、と書きなさい」「ラフマーンとは書くな。それ以外なら何でもいい。」という態度を示したのでした。これは何故でしょうか。アッラーを、その生活で認めたくなかったからに他なりません。アッラーはその慈悲によって、啓示や預言者たちを通して生き方を指示されるからです。彼らは、自分達のやりたいことを妨げることのない神、という概念を気に入っていたのでした。アッラーが天上界の神であられることには異存はないのです。それに対しアッラーは啓示を通して明快な宣言をされておられます。「アッラーは天においても地においても、神である。」

親愛なる兄弟姉妹の皆様。アッラーが『教えられた』ことに関する章が、慈悲あまねく、という美名によって始められているのではなぜでしょうか。この問いへの答えをごく簡単に述べるなら、次のとおりになります。「教育、教えることの基盤は慈悲である。」

慈悲あまねくお方、という名で始まる章において、「人間を創り」という句よりも前に、「このクルアーンを教えられた。」といわれているのです。その後に続くのは、「物言う術を教えられた」です。これは何を意味するのでしょうか。その意味は次のようなものです。もしアッラーが、学ぶ能力を与えて下さらなかったとしたら、人間は人間ではなかったのです。人間を人間となすものは、学ぶ力なのです。これもまた、アッラーが人間に下さったものなのです。

ところで、何故これが与えられたのでしょうか。この答えは明らかです。無限の慈悲の源であられるからです。人間に対する愛情、慈しみによるものです。人間を創造され、なおかつそれを無能なものとはされなかったのです。もしそうされておられたなら、意志を与えられず、人間を動物達と同じような存在とされたでしょう。またその場合、報奨や懲罰も存在しなかったでしょう。

ここで明らかなように、報奨や懲罰、天国や地獄は、慈悲あまねくお方アッラーの人間に対する慈しみ、愛情のもたらすものなのです。アッラーが、罪人と一緒に罪のない人をも焼かれたら、「あなたの罪は罪人の横にいたこと」といわれたら、私達には何ができたでしょうか。神の正義がなければこの世界はどんな状態になっていたことでしょうか。

つまり、教育の根本が慈悲であるのであれば、ここで必要となるのは、父母であれ、教師であれ、その躾けや教育において慈しみやいたわりを新たにすること、これをアッラーのメトッドとして認識することなのです。